トランプ現象についての雑記帳　2

トランプを支持した人々の気持ちは日本語で言えば「超むかつく」というものではないのか。
ただし、それはトランプによって掘り起こされ増長させられた。
その原因は、インフレ下での生活苦、白人の地位の凋落に対する不安、民主主義・自由などの訳の分からぬ言葉に対する反感、多様性や LGBTQ なども自分たちのキリスト教文化の安定をおびやかす冒瀆に見える。自分たちがついていけないほど情報化が急速に進む中での取り残されているような不安、ウクライナなど外国は支援しているのに、自分たちには何の支援もしてくれないことへの不満、自分たちの信じてきたコミュニティーとは異質な人々の増加に対する不安と、その人々に対する反感・嫌悪・そねみなどであろう。

よく言われているように、トランプは、ラストベルトの白人労働者階級に潜在しているこの種の「むかつき」を掘り起こした。

なぜトランプは、そのような「むかつき」を掘り起こし、増長することができたのか。それは、彼自身がそのような「むかつき」を心の中に持っているからだ。

ただし、彼のむかつきはラストベルトの労働者のそれとは、異なる。

以下は、私のまったくの想像に過ぎないが、彼はもともと大金持ちの出身であり、境遇はラストベルトの労働者とは異なる。彼は一流大学を出ているが、アメリカの大学入学制度は日本のような競争試験ではない。それに、大学に親などが多額の寄付をしたということも考えられる。彼の知識からすれば、実力で一流大学に入れるとは思えない。彼は、学ぼうとしない上に、性格が粗暴であるために、周囲のみんなから迷惑がられ、嫌われたのではないか。それが彼のコンプレックスの根となっているのではないか。彼の大学では、周囲の人間はスマートなエリートとなっていく。しかし、彼は、スマートなエリートにはなり得ない。彼は、不動産業で成功した。億万長者になった。スマートなエリート街道を歩く連中に対し、彼は「ざまーみろ、俺の方が実力があるんだぞ。俺にはお前らの百倍もの金があるんだ！」と思い込むことになった。それは徹底的な反エリート姿勢につながる。
「教養や理念などくそくらえだ」「何がマナーだ」「実力とはどうディールして、どう利益を獲得するかの問題だ」

トランプのコンプレックスは、恵まれた境遇ゆえにエリートに対して敗者となったことで抱いたコンプレックス。
ラストベルトの白人労働者層のコンプレックスは、恵まれない境遇の中で虐げられさげすまれたことによって抱いたコンプレックス。
二つの由来は違う。

しかし、コンプレックスの結果いだくむかつきの対象は同じだった。
トランプは、そのむかつきの対象を敵として激しく攻撃する演出をした。この演出は二項対立的で単純であるがゆえにわかりやすく、ラストベルトの白人労働者層のような人々の扇動に成功した。

「むかつき」は八つ当たり的破壊に向かいやすい。これも最近指摘されていることだが、「トランプならぶち壊してくれる！」彼らはトランプの言動に載せられてこのように思ったのだ。この場合、「ぶち壊す」ものに対する妥当性の吟味はなされない。スマホをコンクリートの地面にたたきつけて壊せばかえって損をするなどとは考えない。とにかく壊せばよいのだ。

トランプは、この支持基盤に支えられて、法律や憲法に違反するようなことでも平気で行う。また、明らかに無知蒙昧と言わざるを得ない関税政策を振りかざす。

愚衆が、独裁者を生み出す。これもよく指摘されることだが、1930 年代にナチスのヒトラーが権力を掌握していった過程によく似ている。アメリカでは独裁が始まりつつある。

ちなみに、独裁化は、すでに、ロシアでは国内的な分断など問題にならない形で 30 年も前から起きてきた。最初は民主主義を支持した大衆は、ソ連崩壊後のインフレに苦しむ中でインフレの元凶は民主主義にあると思い込んだ。民主主義よりもプーチンに頼り社会を安定させるべきだと。彼らは冷酷で執拗なスパイの心性を深く宿したプーチンを神のごとく祭り上げた。

中国も、世界第二位の経済大国に発展した後、習近平政権のもとでやはり独裁化が進んでいる。アメリカは中国の追い上げを好まない。ゆえに中国に圧力をかける。中国はこれに対抗して独裁化を強め、軍備を増強し、国家体制を強めることでアメリカに対抗し世界制覇をもくろむ。